

(自由投稿)

中山道六十九次てくてく旅 「近江から京都」

本部 北沢 三明

今回は、平成二十一年七月七日から十月八日に涉って歩いた近江路から三条大橋終点を中心に書いてみました。

近江路は、柏原宿〔5.9km〕を起点として、醒ヶ井宿〔3.9km〕番場宿〔4km〕鳥居本宿〔5.9km〕高宮宿〔7.8km〕愛知川宿〔9.8km〕武佐宿〔13.7km〕守山宿〔5.9km〕草津宿〔14.4km〕大津宿〔11.8km〕三条大橋です。

今回の中で印象に残った幾つかの場所を書いて見ます。

「柏原宿のやいと」

中山道六十九次の六十番目の柏原宿は、後醍醐天皇の南北朝時代に書かれた太平記に登場し、薬草の宝庫、伊吹山のふもとで「よもぎ」で作られる伊吹もぐさの産地として有名。

旅人はこの宿場でお灸をすえて旅の疲れを癒した。「やいと」とはお灸の事でやいと祭



は、地元の有志が往年の宿場の賑わいを取り戻そうと始めた祭り。当時柏原には「よもぎ」を売る店は数十軒あったそうですが、現在は「伊吹堂亀谷左京」一軒のみが営業している。

柏原歴史館の中にくつろぎの里があり「やいとうどん」を食べてきました。

「番場宿を有名にした番場の忠太郎」

長谷川伸の「瞼の母」の主人公で蓮華寺に忠太郎地蔵が建っています。

番場宿で六代続く「おきなが屋忠兵衛」の息子、「忠太郎」は、父親の道楽がもとで五歳の時に母親が家出し、十二歳の時に父親が死んで天涯孤独。やくざに身を落とした忠太郎は母親の面影を追って江戸に出る。

そして柳橋の料理屋水熊の女将・お浜が母であることを知り訪ね「おっかさん」と呼びかけるのですが、お浜は実の息子であるとは知らずに追い返すのです。忠太郎は「瞼をつむれば、昔のやさしいおっかさんの面影が浮かんでくるんだ」と言い残して再び放浪のたびに出るといふ筋書き。

「摺り針峠から彦根」



江戸時代琵琶湖の周辺には内湖と呼ばれる湿地帯が広がっていました。そこは良い

新田開発の地として干拓され、明治に入ると干拓事業は本格化し、琵琶湖から内湖の姿を消していきました。彦根に入ると「おいでやす彦根市へ」と書かれた標柱が三本立っており、江戸時代の旅人「行商人、旅人、虚無僧」の像が置かれております。夕方彦根城に登ってきました。

「石山寺三井寺そして終点、三条大橋」
京都が近づいてくると、有名なお寺があります。



石山寺は、真言宗東寺派の別格本山。千二

百余年頃、聖武天皇の勅願により、良弁僧正により開基。境内敷地は三万六千坪、天然記念物や世界的にも珍しい珪灰石が見られます。また紫式部が「源氏物語」を執筆した『源氏の間』があります。

三井寺「園城寺」は、天台寺門宗の総本山で、古くから日本四箇大寺の一つに数えられています。俗に「三井寺」とよばれるのは、天智・天武・持統天皇の産湯に用いられた霊泉があり「御井の寺」と呼ばれていたものを、後に当寺の厳儀の法水に用いられた事に由来します。鐘楼は、近江八景「三井の晩鐘」で知られており、宇治の平等院、高尾の神護寺と共に日本三銘鐘に数えられ、荘厳な音色は有名で「日本の残したい音風景百選」にもえらばれている。・・・一回五百円で鐘を突いて来ました。

そして、何時の間にか雨の京都三条大橋にたどり着きました。

中山道の旅は、三年間で歩いた日数は延べで五十六日でした。最初の一年目は月二回の日帰りでしたが、二年目からは、一泊二日になり、後半は二泊三日で新幹線を使っ

という間にという感じですが、途中では参加者が風邪を引いたり、怪我をしたり、迷子になったりで結構いろいろな事がありました。



今回のことで、歩く事が楽しくなり、また多くの人にめぐり合い、時には励まされたり、そして新しい友達が出来た事が何よりの収穫だったと思います。

すっかり歩き中毒に嵌っております、引き続き日光街道を歩いております。

つたないレポートですが、今後とも宜しくお願い致します。